

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2005 年～2008 年

課題番号：17520477

研究課題名 (和文) 中国中世における諸民族の「中国化」と漢民族の形成

研究課題名 (英文) The Change to China of the Various Races in the Middle Ages of China and the Formation of Chinese

研究代表者

川本芳昭 (KAWAMOTO YOSHIAKI)

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：20136401

研究成果の概要：

- ・ 漢から唐までの時期における中国を中心とした東アジアにおける交流と変容について研究史の総括を行った
- ・ 倭国の対外交渉の変遷を奴国の時代から 7 世紀段階まで通史的に考察し、一大卒、那津屯倉、大宰府の成立について古代日本の「中国化」との関連で新見解を提示した。
- ・ 遼と系譜的に関連があると考えられる北魏における文字の問題を取り上げ、文字の存在の可能性を、北アジア諸民族の自立化との関連で追究した。
- ・ 倭の五王と高句麗との関連を古代日本、高句麗の「中国化」と自立化との観点から明らかにした。
- ・ 『宋書』倭国伝に見える安東將軍の意味、それがどのような過程をへて天皇号の採用に至るのかを明らかにした。
- ・ 同時代における遣唐使としての新羅の崔致遠と阿倍仲麻呂の関連性について明らかにし、古代日本、及び中国における中国との交流のもつ意味を個人のレベルで考察した。
- ・ 魏晋から南朝へと受け継がれた世界秩序と北朝から隋唐へと受け継がれる世界秩序の相克を「中国化」の観点から明らかにした。
- ・ 三国期段階の烏桓・鮮卑の問題がその前後の時代とどのような関係を有するのかを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	800,000	0	800,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,900,000	390,000	3,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国古代・中近世史

1. 研究開始当初の背景

代表者はこれまで中国の漢唐間の時代を

中心として漢民族の形成過程、およびそれと連動した古代日本や朝鮮の自立への動向を

追求してきた。その研究は、

①いわゆる倭の五王による中国王朝との交渉の歴史的意味、古代日本や朝鮮における中国文化の受容、中華意識の形成、五胡諸族の中国化、五胡の流入に伴う中国自体の変容という華北に関わる事柄の追究、

②五胡の流入などを避けて大量な華北人口が江南へ流入した結果生じた江南開発の、民族問題の観点から見た進展の具体相、

③江南原住蛮族の中国化過程の追求、などの観点からなされた。

2. 研究の目的

今回の研究において明らかにしようとしたのは、

A前項の①と関連して、邪馬台国・倭の五王の時代と展開する古代日本の歴史において、倭国は果たして中国王朝に朝貢するという意識をもっていたといえるのかという問題の解明、

B②と関連して、北魏とおなじ鮮卑族に起源をもつともされる契丹・遼の中国文化受容にともなう変容の比較研究、

C③と関連して、中国中南部の非漢族の中国化の実態の追求、特にそれを四川と湖南地域について追求すること、であった。

3. 研究の方法

文献を通じての解明、実地調査に基づく解明の二点から解明を目指した。

4. 研究成果

2の「研究の目的」A、B、Cのうち、Aについてはほぼその所期の目的を達した。Bについては、遼金との比較の糸口を解明し終えたにとどまった。Cについては、資金的な問題もあり、全体の概略を把握しえたにとどまった。

以下、本研究で明らかにした点を示す。

当該時代には中国古代の「天下」という概念が拡大して、それまでの中国の領域を越えるものとなった。

古代日本や朝鮮に生じた「天下」認識は中国のその影響を受けながらも、理念的な面ではそれぞれを中心とする「天下」認識であるという点で異質な展開を示した。

この「天下」認識は現実の場面では、古代日本や朝鮮の勢力が現実支配している領域、あるいはその支配が及ぶと主張する領域を示すものであった。

倭王武の時代における倭国にとっての「天下」とは、現実の場面では宋書倭国伝中の彼の上表文にみえる倭国本体と百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓の七国に及ぶと主張するものであった。

所謂邪馬台国時代における一大率は伊都国を中心とする旧倭国勢力を牽制するために置かれた官であり、その意味で一大卒にのちの大宰府の淵源を見ることはできない。

宋書倭国伝の倭王武の上表文にみえる海北の諸国とは朝鮮半島南部の諸国を指す。沖ノ島の祭祀遺物の存在はその勢力が北部九州の一地方勢力ではないことを端的に示している。

那津官家は軍事的要請に基づいて設置されたものであり、その前後の歴史展開を見ると、のちの大宰府の淵源とすることができる。

従来遣隋使段階においては北部九州の地には後の鴻臚館につながるような施設は全くなかったとされるが、なんらかの原初的施設の存在がすでにあつたと考えられる。

軍政機関としての原大宰府は、白村江の惨敗、唐の半島から撤退、倭国における律令制の完成などともなう国際環境の安定化をへて、外交的権能を合わせ持つ官衙として完成する。

その政治体制の完成は、古代日本が中国における中華意識、天下意識を受容し、日本型の華夷秩序を完成した事柄と連動している。

従来、鮮卑には文字がなかったとされているが、拓跋鮮卑にも文字があったと考えられる。

それが制定されたのは、北魏3代皇帝である太武帝の時代であった。

それは漢字の音を用いて、万葉仮名のように記述され、単語と単語を結びつける際、助詞や語尾のような語詞に対して定まった文字が用いられたと考えられる。

鮮卑語で著された書物に、儒教経典などの翻訳書が見られることから、この文字の使用が、民族意識の高揚の結果として生まれたというよりも、その喪失、減衰と関連する面ももっていたことがうかがわれる。

しかしまた一面で、鮮卑語の喪失という場面で、その言語を後裔たちに学ばせんとして、書物の編纂がなされていることは、そこに民族意識覚醒の一面を見出すべきである。

儒教経典などの翻訳書の他に、自民族の英雄伝、詩歌集などがあらわされたことは、日本における古事記や万葉集の編纂とも通ずる点で、注目すべき事柄である。

現存の魏書序紀に見られる神話的部分の記述から敷衍すると、序紀に先立つ原序紀とも言うべきもの、即ちモンゴルの場合でいえば元朝秘史のごときものがそれ以前に存在した可能性がある。

現存の楽府詩集には鮮卑の詩歌集が収められている。その詩歌の中には可汗など鮮卑の言語からの翻訳語彙が見出されるが、現存の楽府詩集に見える鮮卑歌はすでに漢語に翻訳されて掲載されている。

このことは楽府詩集編纂の段階ですでに鮮卑語が失われていたことを意味するが、逆に考えれば、楽府詩集に掲載されている鮮卑歌は、当初鮮卑語で記述された可能性がある。

古代日本においては中華意識の形成がみられるが、その軌跡を五胡・北朝・隋唐に至る中国史の展開と比較するとき、秦漢魏晋の秩序から見ると、同じく夷狄であったものが、それぞれに「中

華」となるという点で、両者は相似た軌跡を描いたことを明らかにした。そしてこの軌跡の類似は、決して偶然に生じた類似ではなく、五胡・北朝・隋唐と古代日本は、秦漢帝国を母胎として、その冊封を受けるといって魏晋南朝的システムの中から成長し、それを突き崩しつつ出現した、という面で共通した側面をもつ国家群であったといえるとした。

鮮卑諸族は南下を経て、中国との関わりを深めつつ、やがて中国の域内で鮮卑諸朝を建て、その中の一つである北魏は中国の統一王朝である隋唐帝国の母胎となる。また、秦代の長城の築城により、黄河文明の開始に発した華夏諸族の拡大は、長城という、それ以南の地を中国、以北の地を胡族の地とするうえでの具体的かつ象徴的なシンボルをもつことによって、一つの画期を迎えることとなった。こうした事態の出現によって、それ以前の時代の華北においてみられた華夷混在の状況は克服され、中国の周辺に四夷が存在するという時代を迎え、長城を南北の境とする華夷秩序は以後の時代に継承されて行くことになる。しかし、中国を目指して南下する北方諸族の動きはその後にも継続し、遙か後世のモンゴルや満州族の例に見るように、中国と共にそれらの諸族の原住地をも包含した大帝国が建国されるようになる。このような観点に立つとき、三国期段階における烏丸・鮮卑の存在は、中国史、あるいは東部ユーラシアの歴史全般とどのような関わりもつといえるのかを明らかにし、当該時期の烏丸と鮮卑はようやく長城地帯において中国と密接な交流を展開する段階に達しており、以後、烏丸・鮮卑は急速な変容を遂げ、また、中国に甚大な影響を及ぼすようになる起点の時期に当たっていたといえること、秦の始皇帝以降にあっても中国の拡大は止んだわけではなく、以後も蕩々として継続した、そして塞外の民族の塞内を目指す動きは、一見するとその方向性が逆であるが、中国の拡大という動きを推進する主要な要素のひとつであったということ

を指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

1 川本芳昭、「三国期段階における烏丸・鮮卑—交流と変容の視点から見た—」、

『共同研究「『三国志』魏書東夷伝の国際環境」研究報告』、国立歴史民族博物館、平成21年3月、p63-81

2 川本芳昭、「魏晋南朝の世界秩序と北朝隋唐の世界秩序」、『史淵』145輯、平成20年3月、p89-126

3 川本芳昭、「崔致遠与阿倍仲麻呂—從古代朝鮮、日本与中国化的關聯来看—」、王宝平主編『中日文化交流史研究』、上海辞書出版社、平成20年2月、p28-50

4 川本芳昭、「4～5世紀中国政治思想在東亞的傳播与世界秩序—以倭国”天下”意識的形成为線索引」、『中華文史論叢』87輯、上海古籍出版社、平成19年11月、p179-200

5 川本芳昭、「安東將軍から天皇へ—5～7世紀における倭国の変容と東アジア」、『中国古中世史研究』18輯、中国古中世史学会(ソウル大学)、平成19年8月、p109-122

6 川本芳昭、「宋書倭国伝にみえる倭王武の上表文と高句麗—古代東アジアにおける歴史展開からみた(韓日關係史学会編『東アジアにおける高句麗と倭』、景仁文化社、ソウル)、平成19年2月、p55-92

7 川本芳昭、「鮮卑の文字について」、21世紀プログラム統括ワークショップ報告書、平成19年2月、pp137-144

8 川本芳昭、「倭国における対外交渉の変遷について—中華意識の形成と大宰府の成立との関連から見た—」、『史淵』143輯、平成18年3月、p27-64

9 川本芳昭、「论漢唐时期以中国为中心的

“交流与变遷”」、復旦史学集刊、創刊号、復旦大学、平成17年5月、p30-46

[学会発表] (計8件)

1 川本芳昭、「遼金の正統観についての一考察」、九州史学会東洋史部会、平成20年12月

2 川本芳昭、「文献史からみた西南夷」、九州史学会総会公開シンポジウム、平成20年12月

3 川本芳昭、「中国王朝と周縁集團の相互認識」、国立歴史民族博物館連携研究「ユーラシアと日本」交流研究会、同志社大学、平成20年11月

4 川本芳昭、「遣隋使における国書の問題」、東アジア史上における遣隋使シンポジウム、明治大学、平成19年10月

5 川本芳昭、「隋書倭国伝と日本書紀推古紀の記述をめぐって」、遣隋使・遣唐使1400周年国際シンポジウム(杭州商工大学)、平成19年9月

6 川本芳昭、「崔致遠と阿倍仲麻呂—儒教文明と中国伝統対外關係国際シンポジウム、山東大学、平成19年9月

7 川本芳昭、「安東將軍から天皇へ」、中国古中世史学会(ソウル大学校)、平成19年6月

8 川本芳昭、「宋書倭国伝にみえる倭王武の上奏と高句麗—古代東アジアにおける歴史展開からみた—東アジアにおける高句麗と倭」、2005年度韓日關係史学会、(ソウル国立博物館)、平成17年10月

[図書] (計2件)

1 川本芳昭、『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』(編著)、すいれん社、平成18年4月、p1-385

2 川本芳昭、『中華の崩壊と拡大—魏晋南北

朝』(単著)、講談社、平成17年2月、
p1-382

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川本芳昭 (KAWAMOTO YOSHIAKI)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号: 20136401

(2) 研究分担者

(0) 名